

第3 問題作成分科会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 経済活動に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。簿記の基本的な仕組みについての理解を問う問題や、企業における日常の取引に関する記帳や基本的な決算手続きを問う問題などを作成する。また、「財務会計Ⅰ」の財務会計の基礎（株式会社の会計の基礎的事項を含む）についての理解も求める。なお、問題の作成に当たっては、教科書等では扱われていなくても、既知の簿記・会計の基本的な概念や原理・法則等を活用すれば、適正な会計処理を導くことのできる問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

高等学校における「簿記・会計」の基本的な知識の習得度及び学習の達成度を判定し、入学者選抜のための適正な資料を提供することを基本方針として問題作成に当たった。すなわち、「簿記・会計」の出題範囲内で、できるだけ特定の分野に偏ることなく出題し、全問を解答させることによって、学習範囲内の広い分野についての基礎的・原理的な事項に関する理解の程度、記帳・計算処理に関する思考力・判断力・応用力等を多面的に判断できるよう工夫した。なお、問題作成に当たっては、学習指導要領に準拠し、高等学校教育の現状をふまえるように努め、かつ高等学校教科担当教員、日本会計研究学会及び日本簿記学会から寄せられた過年度の意見・評価を十分に斟酌した。各問題の出題意図は、以下のとおりである。

第1問（配点A・B計40点）。第1問Aは、簿記の記帳原理である仕訳・転記の仕組みと勘定科目に関する基礎的な知識を問うている。とくに、前期から当期に繰り越された勘定の役割に焦点を合わせている。第1問Bは、特殊商品売買における収益・費用の認識時点を中心に、商品売買形態の違いに応じて求められる簿記処理がどのように異なるのかを問うている。第2問（配点30点）は、商品売買に関する諸帳簿への記入方法の理解、及び帳簿間の関連性についての理解を問うている。第3問（配点30点）は、期中の修正事項から決算に至るまでの簿記処理についての理解、及び精算表についての理解を問うている。

例年、追・再試験は受験者数が少なく単純比較は難しいが、昨年度と比較して得点の上昇が見られた。昨年度の共通テストや本年度の本試験に触れ、新たな出題形式の問題に対する心構えのできた学生が増えたためだと思われる。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

本年度も高等学校教科担当教員、日本会計研究学会及び日本簿記学会から、「簿記・会計」の試験問題に対して御意見を頂いた。問題の全体にわたって綿密かつ詳細に検討され、貴重な意見を寄せていただいたことに対して、問題作成分科会として心から感謝の意を表する次第である。寄せられた意見は今後の問題作成の参考とする所存であり、当分科会としては、今後も共通テストの本旨を尊重して、受験者に考えさせる問題や総合的な理解を問う問題作成に努めていきたい。

① 出題全般に対する評価

高等学校教科担当教員からは、出題内容について、「全ての問題において学習指導要領・解説の範囲内であり、特定の教科書や分野に偏ってはならず、学習指導要領の目標に沿って、簿記・会計の基本的な仕組みの総合的な理解度を見ることのできる問題となって」おり、また「全体を

通して基礎・基本を問う問題と思考力・判断力・表現力等を問う問題がバランス良く出題されている」との評価を頂いた。また、問題の難易度については、「本試験の問題と比較するとやや易しいように思われる」との評価を頂いた。また、配点について、「全てが2点問題で統一されており、どの問題に正解したかによって有利・不利が生じないよう配慮されている」との評価を頂いた。その一方で、「今回の問題では、『財務会計Ⅰ』からの出題が一題も見当たらなかった」という指摘を頂いた。指摘を真摯に受け止め、出題範囲に偏りが生じないようにさらに配慮していきたい。

日本会計研究学会からは、問題の難易度について「学習指導要領の目標や教科書の内容に沿っており、初歩的・基礎的なものから、知識の理解の質を問うような思考力・判断力・表現力等が必要な応用的な問題にまでわたり、受験者の学習到達程度を判定するには適切な出題である」との評価を頂いた。また、配点について、全ての問題が配点2点であり、「受験者の得意・不得意分野による有利・不利が生じづらく、比較的公平に学習到達程度を測定することができると思われる」との評価を頂いた。

日本簿記学会からは、「高等学校学習指導要領（中略）の目標や内容に沿っており、高等学校における実際の授業や学習活動の実態に配慮がなされたものであって、かつ、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う問題作成を志すという共通テストの求めるところに従ったものである」との評価を頂いた。出題内容については「全問が科目『簿記』で履修する内容」であり、「受験者が2年次または3年次に履修している『財務会計Ⅰ』からの出題がなかったので、受験者の期待には十分応じていなかった」との指摘を頂いた。指摘を真摯に受け止め、出題範囲に偏りの生じないように更に配慮していきたい。

② 各問題に対する意見・評価

高等学校教科担当教員からの各問題に対する意見・評価と、それに対する当分科会の見解は、以下のとおりである。

- (1) 第1問Aについては、「基礎的・基本的な問題に思考力を問う問題がちりばめられており全体を通して良問である」との評価を頂いた。個々の小問に関しては、問題全体を俯瞰した上で総合的に判断する能力を問うことを目標としており、受験者の思考能力を問うために適切な問題設定がなされているという評価を頂いた。その一方で、再振替仕訳のように、「授業におけるきめの細かい指導」が必要な設問についての指摘もあったことから、高等学校における授業内容に一層配慮した上で、バランスの取れた問題の作成に努めていきたい。
- (2) 第1問Bについては、全体として、「きめの細かい指導をすることの大切さを感じられる良問であった」との評価を頂いた。他方、設問で問われた部分と同じ用語（積送品）が2回目に用いられた際に、明朝体での表記ではなく（ ）としたことによって、受験者の混乱を招くことが懸念されている。指摘のように、発送費と積送品の区別を問うための措置であるが、受験者への配慮に欠ける面があった。今後は、文章表現の統一性に一層配慮し、受験者にとってより解答しやすい対話文の作成に努めたい。
- (3) 第2問については、「設問全体としては、比較的解答しやすいものが多いが、思考力を要するものもバランス良く配分されており、受験者の思考力・判断力・表現力等を問うことのできる良問であったと思う。ページ配置については、合計5ページにまたがってはいるが、問題を解く際には、見開き2ページずつの計4ページで内容が読み取れるようになっており、読み取りやすさが確保されていた。今後もこのような配慮をお願いしたい」との評価を頂いた。なお、「ク」と「スセ」は論点が重なっていると思われる。10日の資料から商品単価が計算できなかった受験者はどちらも得点することができない。10日の商品単価を求めることは、それほど大変

な作業ではないにせよ重複採点を避けるような配慮が必要であったのではないだろうか」との指摘もあった。今後の出題に当たっては、解答を導くまでの手法も考慮し、論点の重複や重複採点を避けながらより丁寧な問題作成を心掛けたい。

- (4) 第3問については、「設問全体として基礎的な内容から応用的な内容までが網羅された良問であると思われる」との評価を頂いた。ただし、「全体的に作業量が多く、解答に多くの時間を費やしたように感じる」という指摘を頂いた。今後の問題作成に当たっては、出題内容とその精選について留意したい。

日本会計研究学会からの各問題に対する意見・評価と、それに対する当分科会の見解は、以下のとおりである。

- (1) 第1問Aについては、「幅広い論点が上手くまとめられた問題となっている」との評価を頂いた。他方で、資本金の金額の計算に際しては、少々手間が掛かることが懸念されている。本来は、**資料3**の前期繰越額から負債1項目を差し引いて資本金の金額を導くことを意図しているが、その意図が受験者に伝わりにくい面は否定できない。また、各資料と問題文の間を往復する手間についても、懸念が表明されている。この点についても真摯に受け止め、受験者の解答にまつわる負担感をできるだけ減らせるように鋭意工夫を重ねたい。
- (2) 第1問Bについては、やや難易度が高いながら、「思考力を問う良問である」と同時に、「文章量が見開き1ページに抑えられていてよく練られている」との評価を頂いた。個別の問題についても、特殊商品販売それぞれの販売形態の相違点と共通点について思考させる問題となっていることを評価していただいた。今後も、受験者の主体的な学習の成果を適切に反映した問題作成を心掛けたい。
- (3) 第2問については、「個人企業について、単一仕訳帳制度における帳簿組織に関する問題である。補助簿は仕入帳、売上帳、商品有高帳、受取手形記入帳、支払手形記入帳の5種類であり、対象となる取引は、商品売買に関連する取引に、為替取引、裏書譲渡を含む手形取引が含まれたもの八つとなっている。基本的な取引であり、難易度も高くなく良問であると言える。特に、**資料1**の各自推定箇所()が、解答箇所になっている**カキ**、**ク**、**テト**に入るものだけになっているため、()の推定がいたずらに難しくなることのないように調整されていて、評価できる」との評価を頂いた。なお、「問3は、**資料5**の**チ**と**ツ**は約束手形と支払手形の支払人の違いを問う問題であるが、**チ**・**ツ**の解答群がまとめられているため、**チ**と**ツ**には同じ商店名にはならないことが自明であり、ある意味ヒントになってしまっている。解答箇所はどちらか一方でも良かったのではないだろうか」との指摘を受けた。今後の出題に当たっては、解答を導くまでの計算量や作業量についても考慮して、より一層工夫した問題作成に努めていきたい。
- (4) 第3問については、「個人企業の決算手続きについて、精算表の形式で解答する総合問題である。決算に先立って処理する修正事項が5つ、決算整理事項等が9つの標準的な問題で、内容も基本的なものであり正答率は高かったものと思われる。見開き2ページに配置され、適度な余白が確保されており、受験者が解答しやすいように工夫されている」との評価を頂いた。ただし、翌期首における備品売却の問題については、「**⑩**固定資産売却益¥50、**③**固定資産売却損¥75は別の選択肢にしてもよかったのではないだろうか」という指摘とともに、「備品減価償却累計額の減少を考慮せずに取得原価と売却価額の差額として計算してしまった場合」の選択肢を提示していただいた。今後の問題作成に当たっては、出題内容とその表現を精査し、バランスの取れた問題作成に努めていきたい。

日本簿記学会からの各問題に対する意見・評価と、それに対する当分科会の見解は、以下のとおりである。

- (1) 第1問Aについては、「落ち着いて解答すれば正答にたどりつけるもの」との評価を頂いた。個々の設問に対しても、おおむね受験者の理解力を問う上で適切な問題構成であったことが指摘されている。他方で、「仕訳と転記」に関する選択肢に偏りがあること、また資料における「すべて」の表記に統一性が欠けることで、受験者に混乱が生じた可能性が指摘されている。これらの点について真摯に受け止め、今後の出題に当たっては、問題全体の構成に一層留意し、より適切な問題作成に努めていきたい。
- (2) 第1問Bについては、特殊商品がテーマであるだけに難しく感じられる可能性が指摘されながらも、全体としては「解きにくさは感じない」との評価を頂いた。他方で、委託販売に際して、企業会計原則の内容に照らせば、差引手取金を売上計上することに関して問題提起がなされている。ここでは教科書の内容に準拠した問題形式としたが、今後の出題に際しては、委託販売の売上収益の認識方法について再度検討した上で、より適切な出題内容となるよう心掛けたい。
- (3) 第2問については、「資料1」で8月中の全ての取引、「資料2」で総勘定元帳の一部として4つの勘定が示されている。4つの勘定のうち3つは勘定口座名が空欄であり、取引から推定しなければならなかった。補助簿として、「資料3」の仕入帳と売上帳、「資料4」の商品有高帳、「資料5」の受取手形記入帳と支払手形記入帳が用いられており、全ての取引が反映されている分かりやすい資料であった。「資料1」から「資料5」まで理路整然と提示されていたため、受験者は（ ）を帳簿組織の関連から導くという出題の意図をしっかりと確認することができた」との評価を得ている。ただし、「第2問は、個人企業における帳簿組織の問題である。取引と複数の帳簿から数値を推定する箇所が多いため、ここで時間を取られた受験者は少なくないはずである」、「最終仕入の単価が前月比で200%となっており、受験者に計算ミス不安を与えたのは残念であった」、「簿記教育において、値引きや返品を含めた補助簿の作成問題が必要であるかについては検討の余地がある」との指摘もあった。今後は解答を導くまでの計算量や作業量、資料の数についても考慮して、総合的な理解力を問うように工夫した問題作成に努めていきたい。
- (4) 第3問については、「個人企業の決算手続き（精算表の作成）に関する問題である。決算整理事項（見越し・繰延べ等）などに加えて、修正事項があるものの難易度は高くなく、問題読解のための思考力も問われる良問である」との評価を頂いた。ただし、問1では、「保険料については、前払いでの支払単価の変更を踏まえて、次期に繰り越す前払保険料を算出する問題となっており、難易度が高くなっている」という指摘や、問3と問4について「精算表の作成の問題では余り見られない内容であったため、難易度はそれほど高くはないが、戸惑った受験者はいたかもしれない」という指摘を頂いた。出題内容とその表現を精査し、バランスの取れた問題作成に努めていきたい。

4 まとめ—今後の問題作成に当たっての留意点—

当分科会ではこれまで、共通テストの本旨を尊重し、①高等学校における「簿記・会計」の基本的な知識の習得度及び学習の達成度を判定すること、②入学者選抜のための適正な資料を提供すること、の2点を基本方針として問題作成に当たってきた。思考力・判断力・表現力等を重視する共通テストの方針に沿った形で問題作成を行ったが、共通テストも2年目となり、会話文を伴う新しい出題形式にも受験者が慣れてきたものと思われる。

今後も、受験者が問題全体にわたって解答できる時間が確保できるよう留意し、引き続き、学習

指導要領への準拠，教科書で使用されている表現の尊重など，これまでの取り組みを継続していきたい。さらには，簿記の基本的な仕組みについての理解を問う問題だけでなく，企業における日常の取引に関する処理も取り入れ，また，高等学校での学習内容を基に思考することで解答を導くような，思考力を問う問題を作成するよう留意していきたい。より詳細かつ慎重に，出題範囲や内容，出題方法・形式等について検討するとともに，受験者の高等学校における「簿記・会計」の基本的な知識の習得度及び学習の達成度を判定する指標としてバランスの取れた設問となるよう十分に考慮し，識別力の高い良質な問題作成に当たることとしたい。